

子ども教育期における新中間階層の母親業

—— 上海市と南京市の女性を対象として ——

張 紫 萱

1 はじめに

近代産業社会の発展によって、公的領域と私的領域は分離されることとなった。男性が公的領域で活躍するようになった一方、女性は性別役割分業によって家庭という私的領域に留められ、ケアの担い手にさせられることで被った二重の負担と経済的な不利益、家庭内での暴力などの困難に直面していた。

情緒的役割を果たすことが期待され、不可侵な聖域と見なされた（有賀 2011）家庭の内部で生じたこれらの困難は、1960年代以降のアメリカ社会で展開された第2波フェミニズム運動においても問題化されたものである。「個人的なことは政治的なこと」というスローガンが掲げられたこの運動の結果、家庭という私的領域の内部で隠蔽されてきたジェンダー不平等問題が顕在化した（吉原 2013）。

第2波フェミニズム運動は大きなうねりとなり、「家父長制」や「性別役割分業」といった概念が社会に浸透していった。しかし一方で、構造的な支配の強固さを強調するあまり、母親は無力で受動的な、構造的支配の一方的犠牲者として描かれがちという問題が生じた（村田 2023）。

村田泰子（2023）に指摘されたこの問題は、日本だけではなく、中国にも存在する。中国の母親に関する近年の研究の中心は、「母親としての経験と実践」を意味する「母親業（mothering）」（呉 2021）という概念を用いて、母親の妊娠、出産、育児をめぐる実践と不安を明らかにするものである。例えば、林曉珊（2011）の研究では、妊婦である母親はいかなる母親業を行い、どのような不安と葛藤を経験しているのかを明らかにした。また、金一虹と楊笛（2015）の研究は、教育における親の責任と経済的能力、教育意欲が強調されるなかで、母親業の中心が子どもの教育となってきたことと、そうした状況の中で母親たちが経験している教育不安について論じた。

母親業研究によって母親に対する構造的抑圧が明らかにされた一方、母親という存在が

女性たちによって否定される状況が生じた。2019年の春に、「花開富貴老娘発飆」というアカウント名のユーザーは、中国版X（旧 Twitter）とも呼ばれる weibo 上に「誰も教えてくれなかった育児過程上の問題」というタイトルの投稿をした。この投稿は2,000万回以上閲覧され、1万以上のコメントを集めた⁽¹⁾。コメントの中では母親の子育て上の不安体験に対し、「母親になりたくない」、「母親という家父長制の罫に飛び込む人には呆れる」などの内容が散見された。つまり、子どもを持たない女性は、構造的抑圧を認識したがゆえに、母親を家父長制の犠牲者とみなし、自分と相容れない存在と捉えた。さらに、こうした否定は母親を「家父長制の奴隷」や「結婚したロバ」と侮辱する言論をもたらしたとも指摘されている（呉 2020）。

しかし、母親は決してここで描かれたような無力なだけの存在ではない。岡真理（2000）によれば、抑圧的な父権主義の犠牲者に見える女性たちの体制順応的な行為の中にも、実は彼女たちの不断の抵抗の意志があり、そうした抵抗の意思は彼女たちの日常的な営為の中で表明されている。つまり、受動的で不安に見える母親による母親業の中に、実は常に彼女らの抵抗がある。例えば、社会運動に参加する母親を対象とする元橋利恵（2021）の研究では、母親たちは母親業を個人のアイデンティティの一部として生かし、家庭という私的領域から抜け出し、公的領域で行う政治活動への参加を成し遂げていると論じた。また、村田（2023）は母親の「託児」という、社会的規範としての「母親の育児責任」から一時的に逸脱するような実践に焦点を当て、そのなかで母親たちが託児に関する不安をいかに自ら処理し、解消していくのかを明らかにし、母親たちの能動的な側面を見出した。

とはいえ、中国の母親業に関する先行研究において、母親たちがいかに不安を抱えながら能動的に行動しているのか、そして母親業にどのような価値があるのかは十分に明らかにされていない。そこで本稿は、中国の母親に焦点を当て、母親業を単なる構造的支配に対する隷属とみなすのではなく、それらの不安を抱えながら、自ら母親という役割の本質性について考えたり、母子対立を契機に行われた母親業を反省したりするなど母親の能動的な側面を見出し、母親業の価値を考察することを目的とする。

こうした問題意識に基づき、本稿は研究対象を特に教育期の子どもを持つ新中間階層の母親とする。その理由としては、第1に、親族たちが構成する強い育児ネットワークが存在しているため、近年の中国の母親業の負担は、親族によるサポートを得やすい乳幼児の

(1) 残念ながら、この投稿は大きな注目を集めたのち、運営側にセンシティブな内容を含むと判断され、閲覧が規制されるようになった。そのため、クリック数とコメント数というデータは、「花開富貴老娘発飆」というユーザーとのインタビュー、及び彼女の投稿によって引き起こされた議論を記述した文章を参照している（2023年8月15日取得、https://m.weibo.cn/status/4372164763001082?sourceType=weixin&from=10C8395060&wm=9006_2001&featurecode=newtitle）。

世話よりも、子どもの学校外教育に偏っていることが指摘されているからだ（金・楊笛 2015）。第2に、母親の中でもとりわけ、新中間階層の母親は「教育のために自己犠牲的になることを余儀なくされるようになっている」（安 2020: 10）と指摘されているからだ。

本稿の構成として、第2節では母親業という概念および中国で蓄積されてきた母親業研究を整理する。第3節では先行研究の不足点を示し、本稿が用いるケアの倫理論という研究視座について説明する。第4節では調査対象者と調査の詳細を示す。第5節では母親業における不安的側面と能動的側面を明らかにする。第6節ではケアの倫理という視点から中国の母親業を再評価し、本稿に残された課題を確認する。

2 母親業および中国の母親業研究

母親業は、1960年代の第2波フェミニズムにおける母性に対する批判から生まれた概念である（呉 2021）。この概念の提案者の1人であるアドリエヌ・リッチは、母性と母親業を明確に区別し、前者を「女性に本質的かつ生得的に備わった性質」だと考え、「家父長制を維持し、女性を抑圧する重要な制度」だと批判した一方で、後者を「子育てをめぐる母親たちの主体的行動」であると主張した（Rich 1976）。また別の提案者の1人であるナンシー・チョドロウ（Chodorow 1978）はリッチと同様に、母親業の主体性を強調した。チョドロウは著作 *The Reproduction of Mothering* において、女性は本能的受動的に母親という役割を受け入れたのではなく、子ども期に自身と同じジェンダーをもつ母親からケアを受けたため、能動的に母親業を選択したのだと考察した。

これらの研究を契機として、母親業という概念が1980年代以降大きく注目された。異なる階級と人種の女性が母親業の経験を共有した結果、母親業という概念に対する認識はいっそう深められた。具体的には、母親業は女性を抑圧する社会構造と制度から離脱することができず、常にそれらに影響されているが、一方で不安を乗り越える女性たちをエンパワーメントする力も内包している。つまり、母親業は女性に不安と喜びの両方をもたらすという両義性のあるものだとして認識されるようになった（呉 2021）。

母親業という概念は、2009年に中国社会で注目されて以来、研究の関心が主に母親業の抑圧的側面に寄せられてきた。母親業による抑圧を解明する研究のテーマは、主として「インテンシブな母親業」と「パーフェクトマザー」の2つに集中している。

インテンシブな母親業とは、「母親は子育ての中心的担い手であることが要求され、子育てに時間的にも、感情的にも多くを投入することが基準とされる」ことである（Hays

1996: 115)。パーフェクトマザーとは、子育てに関する様々な事項を完璧にこなせる母親を意味する。こうした研究が登場した背景には、計画経済から市場経済への転換、国が提供する子育て支援の廃止、「一人っ子政策」がもたらした「子ども中心主義」など、女性が活躍する舞台が「家庭か職場か」の二者択一ではなく、「家庭と職場」の両方となったことがある。これによって、女性が背負う二重の負担が顕在化しただけではなく、「良い母親」の基準もかなり厳しくなった。代表的な研究をあげると、沈奕斐（2014）の「辣媽」に関する研究は、子どもと家庭のために黙々と自分の外見や職業を犠牲にする伝統的な母親像と異なり、現代的で理想的とされる母親像は、子どもの出産後も一刻も早く産前のスタイルに戻り、仕事と自分磨きを完璧にこなす美しい母という「辣媽」であることを明らかにした。つまり、女性は伝統的な母親のように、子育てによって家庭に埋没してしまうのではなく、母親業を器用にこなす理想的な女性として家庭の外でも輝くべきであるということが、新たな母親像として構築されたことが分かった。その上で、沈は「辣媽」という「パーフェクトマザー」のイメージが女性を不安にさせ、かえって女性たちが自らの母親業を通して母親像を定義することの能動性を消滅させてしまったと、鋭く指摘した。また、楊笛と金一虹（2015, 2022）、楊可（2018）、陳蒙（2018）、安超（2020）などの研究は、教育期の子どもの学校外教育をめぐって母親たちはいかにして教育を計画、実践し、「教育ママ」や「マネージャーのようなママ」のような役割を果たしているかを示した。そして、仕事と家庭の狭間で、母親は「インテンシブな母親業」に疲れ、「子どもの未来を担っているため、完璧な教育の責任者にならなければならない」という教育不安を経験していることが、楊らの批判によって明らかとなり社会問題とみなされるようになっていった。

以上を踏まえると、現在中国の母親業に関する既存研究は不十分だと言える。これらの研究は、母親業の抑圧的側面のみ明らかにし、母親業を母親に不安と自己犠牲をもたらすものと捉えている（楊笛 2015, 2022; 楊可 2018; 陳 2018; 安 2020）。しかし、母親の能動的な側面に注目し、母親たちによって行われるケアの価値を考察する研究がほとんどなされていない。

3 本稿の研究視座

第2節では、母親業には抑圧的側面と能動的側面が併存していると整理した。母親業は2つの側面があるものの、中国の母親業研究のほとんどはその抑圧的側面のみを強調しているという問題がある。能動的な側面を軽視した結果、母親が「家父長制の奴隷」（呉 2020）という構造的支配によって自己犠牲をせざるを得ない者とみなされ、母親でない女

性たちによって否定されるような状況が生じている。

以上を踏まえて本稿は、母親業の両義性を重要視し、中国の母親の不安と能動的な側面を見出し、母親たちによって行われるケアがどのような価値が有するのかを明らかにすることを目的とする。

この問いに答えるにあたって、本稿では母親業を自己犠牲とみなす視点から脱却し、母親業をケアの倫理という視点から捉える。自己犠牲とは、元橋（2022）によれば、命を投げ出すことや命を奪う営みである。しかし、母親業はそれとは反対に、命を産み育み、日々行われる命を維持するための活動である。したがって、母親業は自己犠牲というより、「自己犠牲や他者に埋没することではなく、自分と全く異なる他者と葛藤と共に生きること」を意味する（元橋 2022: 130）。

ジェンダーの視点からケアの価値を見直そうとする議論の始まりは、キャロル・ギリガン（Gilligan 1982=1986）の著作『もうひとつの声で：心理学の理論とケアの倫理』である。ギリガンは、従来の心理学研究の中で無視されていた女性の道徳発達理論を提示しようとした。道徳的問題や自我と他者との関係に関する議論において、女性は当時の心理学理論とは相違した倫理観を有する傾向があったため、女性の道徳性は男性と比較して発達していないと考えられていた。この考えに対してギリガンは、女性の道徳性が男性より低いと思われる原因を、道徳性を評価する基準が男性中心的な道徳観に基づいて作られたものであるからだと分析した（Gilligan 1982=1986）。つまり、当時の道徳発達理論は、男性ばかりの集団を被験者にして構成された男性中心的な道徳観をベースにしたものであり（元橋 2019）、そのジェンダー差を無反省のままに女性に適用したことで、女性の道徳性が低いと考えられるようになったというのである。

そこで、ギリガン（Gilligan 1982=1986）は19歳から33歳までの女性29人にインタビューを行い、望まない妊娠中絶をめぐる意思決定から女性の道徳性を議論した結果、男性に見られる傾向のある「正義の倫理」とは異なる「ケアの倫理」を提起した。妊娠という女性特有の経験において、女性は自己の中で他者を抱えることを経験する。この時期に母親と子どもは自他一体であるため、被験者の女性は、中絶をすれば子どもという他者および自身の体を傷つけるが、中絶をしなければ自分の生活に大きく影響してしまうという葛藤を経験した。これに対してギリガンは、自律的な個人と見なされる男性は他者との分離を求めるが、女性は常に他者との関係性を重要視しており、「他人が必要とすることを感じたり、他人の世話をする責任を引き受けたりすることによって……他人の声に注意を向け、自分の判断に他人の視点を含みこんで」（Gilligan 1982=1986: 22）いるために自己と他者との境界が曖昧になりがちであることを提示した。また、女性の「もうひとつの声」は、他者

との関係性、責任意識、ケアの倫理に基づいて確立されたものであると分析した。

「ケアの倫理」は、長いあいだ不可視化されてきた女性の経験に光を当て、それを他者のニーズに応答する責任の倫理として取り出した。また、「ケアの倫理」はケアを自己犠牲ではなく、自己と他者の境界を簡単に分離できないことからくる葛藤である (Brugère 2011=2014) と捉え直した。

その後、ギリガンの研究を肯定的に受容し、「ケアの倫理」を「ケア労働をする母親の倫理」と再定義することで、母親が行うケアの価値の評価を求める一連の研究がなされた (山根 2010)。これらの研究は、母親業における母親の主体性と能動的な側面を明らかにしてきた。例えば、ジョーン・トロント (Tronto 1993) は、母親業というものは子どもの脆弱性やニーズに応えようとするなかで自然に発生するような行為ではなく、思考を経たうでの計画と準備を要するものであると主張した。ネル・ノディングスの『ケアリング』 (Noddings 1984 = 1997) では、ケアリングを「聞こえなかった母の声」と提起し、母親が子どもにケアを行う際に抱く喜びや不安などの感覚が「倫理の基礎を形成している認識」 (Noddings 1984 = 1997: 19) であると主張した。また、サラ・ルディックの「母親の思考」 (Ruddick 1995) では、「ケアでは固有な知識にもとづいて他者のニーズを把握する必要がある」 (Ruddick 1995: 357-8) と主張し、母親たちは子どもをケアする時に、保護、成長、社会的受容という要求に応えるために、能動的に母親的思考を行っている (Ruddick 1995: 16-7) と指摘した。それ以外にも、母親業における不安と葛藤について、アーサー・クライマンは、ケアにおいて自他の区別が曖昧で応答責任があるため、いつも愛情に溢れているものではなく、不安や葛藤などが常に伴っていると要約した (Kleinman 2019)。だが、ケアの提供者が不安を受け止めるには、自己犠牲ではなく、自分のニーズを認識して主体性を持って不安をコントロールすることが必要であると提示した (Kleinman 2019)。

確かに、母親はケアにおいて、子どものニーズと依存に対する応答責任が求められる時に、自分のニーズを後回しにする「括弧に入れるような自己」の状態に置かれる (Kittay 1999=2010: 126)。そのためケアは、現状の合理的で自己本位的な社会構造において、自己犠牲的なあり方であるとみなされる (元橋 2019)。しかし、ここまで整理してきたように、母子関係というケア関係に必要とされる母親の自己は、子どもと自分のニーズに配慮し、母子両方を傷つけないというものにもなりうるのである。

以上を踏まえて本稿は、中国の母親が母親業を行う際に、どのように母親業の両義性を経験し、いかに母子両方のニーズを捉えているかを明らかにすることに研究の重点を置き、ケアの倫理という視点から母親業を再評価する。

4 対象の選択と調査の詳細

4-1 教育期の子どもを持つ新中間階層を調査対象とする理由

本稿は、中国の母親の能動的な側面を明らかにするために、研究対象を多くの先行研究のなかで不安を抱える母親として注目される教育期の子どもを持つ母親に絞る。社会背景として、日本などと異なり、中国では親族による強い育児ネットワークが存在している（落合ほか 2004; 熊 2008）。そのため、乳幼児の母親は比較的不安が少ないとされる。しかし、子どもが教育期に入ると、子育ての責任が母親に集中する。この点について楊笛と金(2022)は、中国では近年「教育の母親業化」が進んでいると指摘した。マネージャーのように子どもの教育を綿密に計画し、高度に関与する「マネージャー化された母」が現れたのは（楊可 2018）、「母親業の中心が明らかに教育となっている」ためである（楊笛・金 2022）。もう1つの社会背景は、中国では2013年以降「勉強負担の軽減」に関する政策が打ち出されたが、受験競争は依然として激しいままである。教育の責任が学校から家庭に移転されたことが、教育の母親業化を推し進めたとされる（安 2020）。

そこで本稿は、教育期の子どもを持つ母親たちのなかでも特に新中間階層の母親を調査対象とする。これは、新中間階層の母親はとりわけ教育にコミットし、「教育のために自己犠牲的にふるまうことを余儀なくされ」ており（安 2020）、ほかの階層の母親より教育に関与せざるをえない（王 2017）と考えられているからだ。

新中間階層の教育熱心さは、既存研究でも繰り返し説明されてきた。また、新中間階層の教育熱心という特徴は、異なる国や時代においても見られる。沢山美果子（2013: 185）の研究によれば、大正時代に現れた日本の新中間階層は「子どもをより良く育てる親の責任を強く感じ始めた階層」であった。藍佩嘉（2019）による台湾社会の新中間階層とそれより低い階層の教育実践及び教育理念の比較の結果、新中間階層は、科学的な育児観念を持ち綿密な教育戦略を設計するというだけではなく、時間と金銭の投入により、戦略を計画通りに実行しようとする傾向が伺えた。また、陳（2018）も中国社会での母親業をめぐる議論する際に、新中間階層の母親らは子どもの就学前の段階から細かな教育計画を立て、「人並み以上の子どもに育てたい」という教育熱心な一面を持っていることを明らかにした。

本稿は新中間階層を対象として設定したが、新中間階層という概念の定義は明確ではない。そのため、本稿は中国の新中間階層に関する肖林（2016）、蔡玲（2021）、朱迪（2022）などの研究を参照し、中国の新中間階層は「教育熱心」さや文化資本によって社会階層を上昇させてきたという特徴を持ち、一般的には制度化された文化資本（学歴や資格証明書

など)を活用して就職し、雇用関係から安定した収入を得て生活する階層であると定義する。

また、本稿の調査対象において、専業主婦と働く母親が併存しているため、母親の社会階層を判断する際には世帯を単位とする。これまで女性の階層的地位は、世帯主(ほとんどの場合は男性)の学歴、職業、収入などによって測られてきたが、働く女性の出現によってこのような計測基準の妥当性には疑義が呈されている(赤川 2000)。本稿の母親たちは、学歴の差は大きくないが、専業主婦か有職者かという職業の違いによる個人の収入差は大きい。そのため、本稿は「母親は新中間階層であるか否か」について、夫婦は彼らの社会経済的地位を何らかの方法で共有していると考え「地位分有モデル」を用いて、世帯年収と夫婦の職業(専業主婦の場合は、退職前の職業)から新中間層を判断する。

4-2 調査方法

2018年7月から2019年6月までに参与観察と、2020年4月から2021年4月にインタビュー調査を行った。調査対象は南京市と上海市に住む、小中学生の子どもを持つ女性6名である。

筆者自身が、家庭教師のアルバイトとして参与観察を行った。担当していた科目は試験勉強に重要な科目としてみなされることも多い国語、数学、英語である。少ない対象は週1回、多い対象は週3回自宅に訪問し、学校の宿題から塾の課題まで、母親や子どもの学校外教育機関とも協力しながら、約1年にわたって参与観察を行った。また、毎回家庭教師としての授業を終えてから、親との交流の時間を設け、子どもの勉強状況について報告する以外に、非構造化インタビューの形で「母親として体験した困難と喜び」、「いまの家庭構造」、「親族の役割」、「学校外教育における取組み」といった内容について聞き取りを行った。

また、母親業についてより詳しく分析するために、2020年4月から調査を再開し、一人あたり1時間から1時間半程度のインタビュー調査を行った。したがって、本稿の調査対象は6名という少人数ではあるが、調査内容の深さと語りの豊富さは保証されている。

4-3 調査対象の情報

本項では、調査対象である母親たち個人の情報と調査時点での学校外教育へのコミットについて説明する。まず、母親たち個人の情報について説明する。情報を表1にまとめた。

表1 調査時の対象者の個人情報

名前	年齢(生年)	学歴	職業	夫の職業	子ども年齢・性別	世帯年収
専業主婦層						
T	43(1978年)	短大卒	経理—専業主婦	管理職	12歳(小6女)	660万円
F	41(1980年)	専門高校	経理—専業主婦	管理職	13歳(中6女)	500万円
Z	38(1983年)	大卒	貿易—専業主婦	営業	10歳(小4男)	450万円
働く母親層						
J	39(1982年)	大卒	軍人—事務職	軍隊監察	11歳(小5男)	500万円
X	39(1982年)	大学院卒	自営業の塾講師	自営業	10歳(小4女)	700万円
D	36(1984年)	大卒	管理職—自営業の 留学指導	営業	10歳(小4男)	1200万円

今回の調査対象の中で、妊娠や子育てのために退職し専業主婦になった人は3人いる。そのうち、妊娠してすぐ仕事をやめたのはTさんとZさん、子どもの教育に専念したいと考えて専業主婦になったのはFさんである。ほかの3人は就業を継続している。

Tさんの場合は、自分が子どもころは「**家庭の雰囲気がとてもよかった**」と言い、親子関係が良好であった。そのため、Tさんは子育てに対する憧れと家庭生活に対する愛着を持っており、妊娠後に専業主婦になったという。

Zさんは、長男を出産したあと、「**職場に戻るのを難しく感じていた……まああの時は、子どもも母親のことを必要としていたから**」と専業主婦になったきっかけを述べた。彼女は子どもの教育を「**今の母親としての自分にとって、最もやるべき事**」だと認識していると語った。

Fさんの場合は、結婚と出産後に「**女性も働くべき**」という社会規範に従って、元の職場に復帰した。しかし、Fさんは娘が小学4年生になった時に、仕事の負担と娘の教育に対する不安を覚えたため、専業主婦になったという。

Jさんは、元軍人であったため、退役後に国家の行政組織に就職し、毎日午後五時前後に定時で帰ることができているという。また、夫が長期出張中であるため、Jさんは自分の両親と共に暮らしている。この2つのことから、Jさんは仕事を継続しながら子どもの教育に打ち込むことが可能となったようだ。

Xさんは夫とともに自営業の塾と放課後児童クラスを経営しており、両者共に時間の融通が利く。そのため、Xさんは仕事を辞めなかったという。

Dさんは、調査当時、夫が浙江省で単身赴任していた。子どもが生まれてからは、姑がDさんの両親の代わりに、上海に子育てを手伝いにきた。Dさんは「**夫がいないのは大変**

「ただ、姑の手伝いがあるのは助かる。自分の仕事はすごく好きで、やりがいもある。また、息子の将来の留学計画や結婚用の家の購入などを考えて、仕事は辞められないですね」と働き続ける理由を述べた。仕事と子どもの教育を両立するために、2018年にDさんはこれまで培ってきた人脈やキャリアを利用し、会社を辞めて個人経営の留学指導を始めた。

続いて、母親の学校外教育に対するコミットについて説明する。今回の調査対象者についてみると、塾と習い事という2つの教育サービスを併用している母親がほとんどである。しかし、利用の目的は「学力向上への期待」と「学力以外の能力向上への期待」に分けられる。学力向上への期待を主な目的とする母親たちは、塾の利用をとりわけ重要視する。一方で、学力以外の能力向上への期待を主な目的とする母親たちは、習い事に力を入れている。目的別に分類し、利用状況を表2にまとめた。

表2 学校外教育サービスの利用状況

母親	利用者	塾	習い事
学力向上への期待を主な目的			
J	11歳息子	英語、数学、国語の読解と作文 (1回/週)	ギター、美術 (1回/週)
X	10歳長女	国語、数学 (1回/週) 英語 (2回/週)	美術、ダンス、古箏 (1回/週)
F	13歳娘	英語、数学 (1回/週)	水泳 (3回/週)
学力向上以外への期待を目的			
T	12歳娘	英語、数学 (1回/週)	ダンス、サッカー (1回/週)
D	10歳長男	英会話 (1回/週)	ドラム、プログラミング (1回/週)
Z	10歳長男	無	囲碁、美術、書道、琵琶 (1回/週)

調査対象者のなかで、子どもの将来的な社会的地位の向上を念頭に置いた学力向上への期待を主な目的として学校外教育を綿密に計画してきたのは、専業主婦ではないJさんとXさん、そして専業主婦のFさんである。三人はいずれも、「教育によって今の豊かな生活がある」と考えており、教育を特に重要視している。

学力以外の能力向上への期待を主な目的として学校外教育サービスを利用しているのは、TさんとDさん、Zさんである。彼女らは、子どもに勉強と受験を通して階層移動を成し遂げてほしいというわけではなく、「友人と同じ塾に通わせたい」、「自分を養える能力を培いたい」、「物事を継続する力を身につけてほしい」などと語っており、学力以外の能力向上を重視している。

ここまで、母親の基本状況と学校外教育をめぐる取組みについて説明してきた。これら

の情報を踏まえ、次節では彼女らの母親業における不安の感情と能動的側面の両面から分析する。

5 母親業における不安的側面と能動的側面

繰り返しになるが、本稿の目的は、母親業を単なる構造的支配に対する隷属とみなすのではなく、その中にある不安的側面と、母親の主体としての能動的な側面の両面から分析し、母親たちにとってのケアの価値を明らかにすることである。

5-1 母親業における不安的側面

本項では、分析を通して2つの不安的側面を見出す。1つ目は、教育における「子どもに付き添う」という規範により、母親業を実践する負担が重くなったことである。現在の子どもの教育に対して、母親たちは自分たちの親世代が子育てを行っていた時期に比べてより多くの時間と体力が要求されるようになった。2つ目は、母親たちは学校外教育にコミットするために、教育サービスを利用した結果、子どもの教育の中心的役割から徐々に排除されてしまったことである。

5-1-1 「付き添い」という母親業規範

母親業規範について語る際に、本稿の調査対象者である母親たちは「子どもに付き添うこと」を規範として捉えており、この規範から逸脱した母親を良くない母親と認識している。母親たちは、自分が良い母親であり続けるために、規範を守ることで生じる自身の時間・体力の不足と、子どもから離れることができないということへの不安を感じている。張品と林曉珊（2020）の実証研究のなかで、「付き添うこと」は0-6歳の乳幼児の育児段階において、すでに家庭内の新たな育児規範になっており、家族意識にまで浸透してきたことが提示されている（裴 2022）。しかし、本稿はこのような倫理は6歳までの乳幼児育児段階においてのみ見られるものではなく、義務教育段階にまで浸透していることを主張する。

学校外教育における「付き添う」という母親業規範を確認するために、筆者は二つの質問をした。まずは「どのような母親を良い母親だと思いますか」という1つ目の質問をした結果、母親たちは全員が「子どもの勉強と成長の過程のなかで、どんなときも子どもの傍に付き添っている母親は良い母親である」と回答をしていた。

そして、母親たちが日常的にどのような付き添いを行っているかを確認した上で、2つ目に「どのような母親を良くない母親だと思いますか」という質問をしたところ、母親た

ちの回答からは「子どものニーズより、自分の職業や社会資本の蓄積など個人の成長に関心を置く母親」が良い母親であるという共通の母親像が見出だされた。

「子どもの傍にいてあげずに、自分のライフコースばかりに集中し、楽になりたい母親は失格だね。」———Fさん

「子どものニーズを後回しにし、自分のことをばかりやる母親。」———Tさん

「子どもの勉強内容に無関心、無責任で、宿題を子どもに一人でやらせる母や子どもの成長に関して計画を立てないような母親だと思う。」———Jさん

では、母親たちは自分が良い母親であり続けるために、どのように子どもに付き添うという母親業規範を順守し、どのような不安を抱えているのか。

まず、規範の順守という観点から聞き取り内容を分析する。母親たちの語りから、「付き添う」ことは主に「顕在的」な行為と「潜在的」な行為の2種類に分類できる。「顕在的」な付き添いの例としては、子どもが下校後の勉強を始めてから終えるまで母親が同席し、子どもの様子に気を配り事細かに対応するといったことが挙げられる。「顕在的」な付き添いにおいて、母親は「子どもの隣にいる」という直接的な形で学校外教育に参加し、「母子二人」は一体化しているかのように勉強に取り組む。例えばFさんは、「傍で宿題を一緒にやるべきだ。隣に座っていれば、間違っている所があればすぐ気づけるし、すぐ注意できるね」と言い、Dさんは「ずっと隣にいる。そうじゃないと、ちゃんとやってくれないから。前は「自分でやって」って言って一人で勉強をさせてみたけど、結果は散々でしたね」と述べた。

一方で、「潜在的」な付き添いは必ずしも子どもの隣にはいないが、心理的に「共同存在」であるような態度を指す。子どもに「母親と一緒にいる」ということを意識させ、たとえ「一人」であっても勉強できるようになることを目指す。「潜在的」な付き添いの場合は、母親は子どもの机という学校外教育の第一線の間から離れていても、子どもに近くにいることを意識されているゆえに、付き添いが続けられていると解釈できる。例えば、Tさんは「子どもは母を見ると安心するから、放課後はずっと家という同じ空間にいたい。それぞれが自分のことをやっても大丈夫なので」と説明し、Jさんの場合は、「私はリビングで自分のことをやって、息子は書斎で宿題をやる。私は書斎にはいないが、息子は私がいるということ意識しているから、安心して勉強できる」と語った。

次に、母親たちが抱えている不安という視点から分析する。母親業規範であると考えられている「付き添う」ということの重要性は母親たちの語りの中で強調されている一方、

母親たちが子育てに自身の親世代より多くの時間と体力が要求されるようになってきている。

自身の親世代である1950年代生まれの母親たちは、労働することが愛国精神の体现であるという思想の下で、「国を建設するために家庭と子育てを後回しにする」という国の宣伝に従い（左2005）、子どもの教育を全般的に学校に任せきりにしていた。しかし、1980年代以降に中国社会で起こった構造転換の結果、「一人っ子政策」によって1世帯の子どもの数が大幅に減少し、家庭の資源とケアが子どもに集中し（閻2017）、子どもの養育が家族の中心的な役割として強調されるようになった。そして、ジェンダー役割と「勉強負担の軽減」に関する政策によって、子どもを教育する責任は特に母親に重くのしかかるようになった。

「付き添うのは非常に時間がかかる。だから私と同じくらいの年の母親はみんな、今日自分のこともやらないといけないと焦ったり、今日も夜更かししないとだめかなと心配したりする。」———Jさん *「子どもが勉強する時に、家以外の場所にはいけないから、イライラする時もある。母親が一番子どもの教育に携わっているからね。」*
———Fさん

子どもの教育に多くの時間と体力が必要とされている中で、母親たちは良い母親であり続けるために子どもに付き添い続けることで、自身の時間と体力に対する不安と、自身の行動が子どもの周囲のみに制限されることによる焦燥感を抱えている。

5-1-2 母親が子どもの教育に果たす役割の周辺化

調査を通じて、母親たちは市場化された教育サービスを利用することで、子どもの主たる責任者としての自身の地位を少しずつ失っていってしまうのではないかという不安を抱えているということが見えてきた。

付き添いを通して子どもの学習状況を把握した母親たちは、子どもの教育に力を入れようとする際、塾や家庭教師などの教育サービスへ外部委託をするという方法をとることがある。教育サービスを利用する理由として、自分が子どもに勉強を教えることの理想と現実のギャップがあったことが語られていた。

「私にもわからない内容がたくさんあって、特に英語と国語はいい教え方がわからなくて、いつも塾の先生や家庭教師の子にお任せしている。」———Tさん

「いまは子どもの質問さえわからないから、外部の先生に任せている。」———F

さん

「私は先生だから、教えることはそんな簡単なことではないとはわかっている。だから親自身が子どもの勉強を教えるのは難しい。やっぱり専門のことは、専門の人にやらせるべき。」———Xさん

「教えたことはあるけど、どうしても息子は理解してくれなかった。そういう挫折感があまりにも強かったから、私はこれを時間の無駄だと考えちゃった。だから、先生に頼った。」———Dさん

こうした語りから、自身が子どもに勉強を教えることの理想と現実のギャップは、母親自身の知識の欠如と教える能力の欠如によって生じたと考えられる。知識の欠如とは、子どもに付いて勉強を教えたいが、自身が知識を備えていないために教えることができない場合である。教える能力の欠如とは、知識はあるが、教えたとしても問題をわかりやすく説明できず、子どもに理解されないことである。

母親は社会的に「教育の責任者」としての役割を期待されているが、役割遂行と現実の間にあるギャップに苛まれている。母親は教育の責任者という役割を果たすため、自分の知識や能力に限界を感じた際に、市場化された教育サービスを積極的に利用する。その結果、学校外教育における母親業の実践は、教育サービスを利用することで「宿題の付き添い」にまで縮小し、母親は子どもの「教育の責任者」から「時々子どもの質問さえわからない」という勉強の「付き人」にまで降格してしまうのである。

子どもの教育のために多くの時間と労力を費やしているにもかかわらず、子どもの教育の中心的役割からは排除された結果、母親たちは自分の指導を子どもが受け入れてくれなくなったことからくる不安に直面している。

「早く勉強しなさいって娘に言ったら、でもお母さんは私の宿題を指導できないし、分からない問題あったらどうしようと言り返される。」———Tさん

「息子が小学生になってから、徐々に私の勉強に関する意見や宿題の解答を疑うようになった。勉強をやりたくないと言われと、どうしたらいいのかとストレスを感じるね。」———Dさん

ここまで本項では母親業における不安的側面を明らかにした。分析を通して、子どもの教育期における不安は、先行研究で提示されていたような教育資源の獲得をめぐる競争で敗北する不安(金・楊笛 2015)、子どもを成功させるという教育目標を達成できない不安(楊

可 2018) 以外に、2つの側面があるとわかった。1つ目は、「付き添う」という母親業規範を守ることにより、自身の時間と体力に対する不安と、自身の行動が子どもの周囲のみに制限されることによる焦燥感である。2つ目は、母親たちは教育の責任を果たすために、教育サービスを利用したが、自分が子どもの教育の中心的役割から排除され、教育に関する指導を子どもが受け入れてくれなくなったことによる不安である。

これらの不安に対して、母親業にはどのような能動的な側面があるのかについて、次項で説明する。

5-2 母親業における能動的側面

本項では、分析を通して2つの能動的側面について説明する。第1に、母親業規範に対して、母親は規範を順守する一方で、それを利用して自分のアイデンティティを形成している。具体的には、母親は子どもへの付き添いを通して自己を再認識し、母親役割を引き受ける理由を曖昧で本質的なものから明確なものにする。また、規範を順守する中で生じた母子対立を契機として、自身の母親業の在り方を反省して母子関係に対する理解を深める。具体的には、母親は母子対立をきっかけに、母子両方のニーズに応えられるようになった。第2に、母親は学校外教育にコミットすることによって、「教育資源の獲得をめぐる競争で敗北する」(金・楊笛 2015) ことや「教育目標を達成できない」(楊可 2018) ことなどの教育上の失敗に対する不安を解消しようとする。

5-2-1 付き添いという母親業規範を通して

まず「子どもに付き添う」という母親業規範は、母親の負担を重くした一方、母親に自分を再認識する時間と機会を与えているという点について論じる。母親たちは、自身が子どもを産んで「母親になった理由」を自身の女性という性別に基づくある種本質主義的で「自然」なものであると考えていたが、その認識は子どもへの付き添いをきっかけにより明確なものへと変わっていったと語っている。

調査対象者たちは当初、子どもを産んで母親になることを決めた理由を「女性だから」という生物学的属性に帰していたという。「自然なことだと思ったから」、「人生のなりゆき」、「女性だから特別な理由を考慮しなかった」などの語りから、調査対象者たちは明確な理由を持たずに子どもを産んで母親となることを決めたことが伺える。

「最近、子育てに不安を感じている人が多くて、例えば、子どもの将来を心配したり、自分の健康を心配したりするとか……ご自身が母親になる前に、何か考えたことがあ

りましたか。」———筆者

「なかったよ……そうね、なかったわ。子供を産むのは極自然的なことだからね。」

———Jさん

「そんな、考えてなかったよ。結婚の後は妊娠って感じ。まあ、タイミングを待っている人もいると思うが、どうだろう。よろしくないと思うけどな。そういう人たちはさ、タイミングを逃しちゃう。だってさ、人生なんて、完璧なタイミングなんてないから。お金がない時は、今じゃないって、お金があつたらまた時間がないと思うかもしれないからね。」———Xさん

「先に何かを考えたことはないよね。まあ、女性だから？一応こういう、ありふれた自然な流れで母親になったよね。」———Zさん

「母親になるのは人生の一つの段階とずっとそう思っていたから、大した理由はあの時なかったよ。人生の段階だからね、妊娠したらそれは産もうとするよ。」———Fさん

「人生はなりゆきですから、理由とかはちょっと真面目すぎかな？妊娠したと気づいたら、ああそっかっていう感じで、母親になった。」———Tさん

「そりゃ考えすぎ！あなた達本当にいろいろ考えてるね（笑）。私はあの時同棲し始めて、仕事も安定していて、妊娠したと分かったら、産むでしょうって感じだった。」———Dさん

しかし、子どもに付き添う過程において、母親は子どもと相談しながら塾や習い事を決め、子どもの将来を計画するなどの一連の実践を行う中で、母親としての自分と何度も向き合ったという。こうした過程を経て、調査対象者たちは自分が母親になった理由を「自身が子どものころに求めていた母親像を自分が体現したいから」だと考えるようになったという。

「ずっと厳しい教育を受けてきて、お母さんは情熱的な人ではなかった。幼い頃から、両親は忙しく、私と兄のことをあんまり見てくれなかった。だから、自分が母親になってからは、子どもの付き添いをした。私は教師なので、仕事上のことでもよく自分のことを省みたりする。そして思ったのは、私が母親からもらえなかったものを、ぜひ自分の子どもに与えてあげたい。子どもに愛をいっぱいあげたい、子どものニーズにちゃんと対応したいなどの自分の理想を実現したいなら、私自身が母親になるしかないよね。」———Xさん

「私と弟は留守児童⁽²⁾だった。実家は農村だからね、父と母は出稼ぎに行って、年間帰ってくる回数に限られていた。だから、私は小さい頃から一人立ちしていて何でも自分でやってきた。だって、助けてくれる人はいないんだもの。親と一緒にいる時間はほとんどなかったから、疎外感あるよね。そういう孤独感と疎外感に苦しんでいた。そして、息子が生まれ、私は母になった。息子に付き添って勉強して、息子をいっぱい愛する。それを通して急に、理由が分かったような気がする。私は母親になり、子どもと親密な関係を持てば、この世界に孤独な子どもが一人少なくなるのではないかと思った。」———Dさん

「私の親は子どもにプレッシャーをかけたくないから、高望みはしてなかった。そのおかげで、私は不器用であってもずっと幸せな生活を送ることができた。それは多分、子どもの時に母親から愛と力をもらったおかげ。そして、てんちゃん⁽³⁾が生まれ、学校に入学した。いろいろ忙しかったけど、子どもと一緒に色んなことをやる機会ももらっていた。私は母としてね、自分の母親からもらった愛を、もう一人に分けることができるのは、私にとってはすごく大事なんだ。」———Tさん

このような「母親になった」理由は、母親たちが子どもとの付き添いをきっかけに、自らのライフヒストリーを顧みて自分なりの解釈を通して得られたものである。それはつまり、母親業規範という一般には母親を抑圧するものとして捉えられるものに対して、母親たちは単に規範に服従する受動的な存在ではなく、規範をも利用して能動的に自分のアイデンティティを形成しようとしているのである。

続いて、母親たちは付き添いの過程での母子対立を機に、母親業を反省して母子関係に対する理解を深めたという点について論じる。

母親たちは子どもの教育の責任者という役割を引き受けたが、自分だけでは子どもの宿題を十分に教えることができない、あるいは自力で子どもの将来を計画することができないなど、他人に依存しなければならないという脆弱性を意識し、子どものニーズに応答しようとする。責任を持って応答することにより、子どものニーズはそのまま自分のニーズへと変容してしまい、自他の区別が曖昧である（岡野 2015）。

調査のなかで、そうしたニーズにおける自他の区別の曖昧さは、息子の作文を教えた際のJさんの語りに端的に表れている。Jさんの息子のクラスの国語の先生が、2019年の4

(2) 中国において、留守児童とは、親が出稼ぎにいった結果として農村部の実家に残された子どもを指す。

(3) Tさんの娘のあだ名。

月に春の行楽をテーマとした作文を宿題として出した。Jさんは息子から、宿題を完成させるために週末に春の風景を見に出かけたいと言われ、週末に休息するという自分の予定を変更して作文作成に関する計画を立てた。

「遠い場所はだめ、往復は疲れるから。あと、家に帰ったらまずシャワーを浴びさせるでしょ。作文を書く前にも、ちょっと休憩させないとね。……息子が初稿を完成させてから、私が修正してあげる。修正が終わったら、息子に教える。最後は息子が内容を学校の作文ノートに写す。いろいろ忙しいから、ちゃんと提出できるように、行きと帰りの時間もよく考えておかないと。」

「私が一緒に行かないと、息子から作文に関する話を聞かれたら、協力しにくいと思ったけど、結局私は無理して疲れてしまって、作文を修正する時にピリピリしてしまった。このようなことがあったから、次に私が行けない場合にはほかの人に頼むと決めた。」———Jさん

この事例からは、Jさんと息子の間の自他の境界の曖昧さが読み取れる。本来ならば、作文の完成は子どもの宿題である以上、Jさんは自分の予定を変更する必要もなく、計画を立てる必要もない。しかし、Jさんは小学生である息子が自分に依存している脆弱性を意識し、責任を持って応答するため、作文の完成を自分の宿題のように捉えるようになった。つまり、子どものニーズは母親のニーズに変容してしまった。

しかし子どもを抱え、自他の境界の曖昧さを経験しているからこそ、母親業実践は母親が自身のニーズを犠牲にするということの意味していない。なぜなら、母親は子どものために自身のニーズを犠牲にすると、かえって対立が生じてしまい、母親業実践に支障をきたしてしまうからだ。Jさんの場合において、経験した母子対立をきっかけに、良い母子関係を築くには単なる子どもの「作文のニーズ」を満たすのではなく、自身の「休息するニーズ」も満たさなければならないと意識するようになった。

以上からは、母親業をすることで母親たちの母子関係に対する理解が深まったと言える。調査対象者の母親たちは、最初は子どものために自分のニーズを抑圧していたが、母親業を通して「母子両方を傷つけないことで、よりよい母子関係を築くことができる」と認識し、母子のニーズは対立的なものであるとは思わなくなった。

5-2-2 学校外教育にコミットすることを通して

中国社会で行われた母親業研究では、学校外教育にコミットすることが、母親に不安を

もたらしているという指摘があった（金・楊笛 2015; 楊笛・金 2022）。このような研究は、不安の原因を、母親が学校外教育において完璧な教育の責任者になれないことへの恐怖感、及び教育のマネージャーとして良質な教育資源を獲得できないことにより、子どもを成功へと導くことができないことへの不安であるとしている。本稿はそれらに、「教育の中心的役割から排除される不安」を加えた。

しかし、学校外教育によってもたらされた不安に対し、母親たちは学校外教育にコミットすることを、不安を軽減するための道具として捉える場合がある。母親の学校外教育へのコミットとは、多くの場合に以下のようなことを指す。母親たちはまず、どのような教育サービスを子どもに受けさせるかをめぐって、子どもの能力と趣味、性格という観点から夫と子どもに何回も相談する。そして、候補となる教育サービスをほかの母親と共有することで、評判と先生の状況を把握する。その上で、費用と自宅からの距離を総合的に考察する。さらに、学校の宿題や下校時間、母親自身の予定を考慮して、選定した教育サービスに通う週間スケジュールと送迎の担当者を決める。教育サービスが始まれば、母親たちは子どもの学校外教育の宿題と演習に付き添い、子どもをサポートしながらサービスとスケジュールを調整する。また、学校外教育の先生とも定期的に交流し、子どもの授業態度と成績を把握する。

前述したように、調査対象者の母親たちは学校外教育を利用する目的を、学力以外の能力向上の機能まで拡大した。調査対象者である T さん、D さんと Z さんは、学校外教育に「社交」や「趣味の発見」など学力向上と関係のない目的を設定して習い事に注力し、子どもが成功するということは「普通で幸せ」、「趣味を持つ」、「自立できる」人間になることが不可欠であると主張しつつ、教育上の失敗および自身が教育の中心的役割からの排除されることへの不安を軽減しようとした。

「息子さんは勉強が苦手って先ほどおっしゃいましたが、受験競争が激しいという状況のなかで、やはり心配とか不安とかを感じますか？」———筆者

「それね、息子が1年生か2年生の時までは、少し悩んだよ。将来大丈夫かなって、ちょっと不安を覚えたって感じ。でも息子はいまドラムを習っているじゃん。結構好きで、ずっと練習とかして。一回、私は冗談みたいに、息子に勉強できないけど将来大丈夫って聞いたら、彼は「大丈夫だよ、僕は将来ドラムの先生にでもなって、自力で稼げるから！」って言ってくれた。そうだね、別に自立には受験とか勉強とかそういう道しかないっていうわけでもないし、楽しく生きていけるなら、私は母親としても満足と思ったの。だから今は不安とかほほないかな。」———Dさん

子どもの成功に関する判断基準が変化するにつれ、母親は教育の責任者としての母親としての成功に関する基準をも捉え直すようになった。母親たちにとって自分が背負っている責任という言葉の意味合いは、子どもを受験において成功させるという一元的な意味から、自立的で好奇心豊かな人間にするというより多元的な意味を持つようになった。母親としての責任を果たす方法も、受験戦争で勝利させるということから、普通でも幸福な子どもを育てるというより多元的なものとなった。こうした変化により、母親にとって、教育の中心的役割からは排除されたものの、そのことは普通でも幸福な子どもを育てるといふ目的には悪影響を及ぼさないと考えられるようになったのである。

学校外教育は確かに、母親に不安をもたらした。しかし、母親たちは学校外教育にコミットすることで、子どもの学力以外の能力を発達させて自立できる可能性を見出すようになった。こうした転換によって、母親たちは「子どもにより良い人生を送らせる」という安心感を得て不安を軽減しようとしていたのである。

6 おわりに

ここまで本稿は、中国における母親業研究が、母親業を構造的支配に対する単なる隷属とみなし、母親業の価値を検討してこなかったという問題を指摘した上で、母親業における不安と母親の主体としての能動的な側面を明らかにした。

結びとなる本節では、母親業がどのような価値を有するのかという問いに対して、改めてケアの倫理という視点から考察する。その後で、本稿が残した課題について確認する。

ここでもう一度ケアの意味を確認しよう。「ケア」は、トロントによれば、

最も一般的なレベルでは、ケアはわれわれの身体、自分自身及び生活環境という「世界」に生き続けるために、その維持と継続、修復にまつわるあらゆる実践である。われわれは生命を維持するための複雑な網の目にケアを織り込もうとしているのである。(Tronto 1993: 103)

母親業はこうしたケアの典型例であり、母子関係はもっとも一般的なケア関係であるとされる。

本稿はこの視点に基づき、設定した問いに答えるものである。中国の母親業は、母親自身のアイデンティティと母親という役割に対する理解を新たな段階に至らせる可能性を含むという価値があると再評価することができる。

既存研究は、母親の子どものニーズに応えるために不安になるというネガティブな面を強調し、それを犠牲的なあり方であるとみなしてきた。確かに、本稿の母親たちは「子どもに付き添う」という子どもへのケアを中心とする母親業規範や「教育の母親業化」という社会からの要求によって、不安を経験していた。

しかし、構造的支配の中であっても、本稿の母親たちは母親業を行うことで、能動的に学校外教育の利用目的を変化させ、自らのアイデンティティに対する認識を深め、母子対立を契機として母子両方のニーズに応えようと行動し、母親業に必要とされるものは母子両方のニーズに応えようとする責任のある自己だと認識するようになった。

ギリガンによって提示されたケアの倫理論を参照して中国の母親業を考察すれば、母親業は母親のアイデンティティと母子関係に対する理解を新たな段階に至らせる可能性を含んだものであるといえよう。例えば、母親が専業主婦になるかどうかの判断基準は、子どものニーズに対する配慮と自分のニーズに対する考慮という2つの側面からなされており、子どものケアに対するニーズと自身の仕事に対する意欲、家庭に対する愛着をすべて考慮した上で判断を行っていた。また、母親たちは当初子どもの依存と教育のニーズに応えるために自身のニーズを重要視していなかったが、次第に母子のニーズは対立的なものではないと思うようになり、自分のニーズに応えることでよりよい母子関係を築こうとした。つまり、母親たちは相手の期待に沿うために自己を犠牲にしようとする他者志向の段階から、自分の欲求にも向き合い、自他両方を傷つけない非暴力の道德性へと発達した可能性が示唆された。ここまで、本稿では中国の教育期の子どもを持つ新中間階層の母親を対象として、母親業の中にある不安と母親の主体としての能動的な側面を見出し、ケアの倫理という視点から母親業を再評価することを試みた。

本稿で明らかにされたこの知見は、既存の中国の母親業研究における空白を補うものであることに加え、母親業の価値を再認識することによって母親に対する否定的な価値観を解消することも期待できる。リッチ (Rich 1976) が主張するように、女性⁽⁴⁾を不平等と抑圧から解放する方法は、母親業を放棄することではなく、母親業が内包している力を引き出すことである。

最後に本稿が残した課題を列挙しておく。第1に、調査対象の居住地域を限定したため、本稿の分析結果を中国社会全体に一般化することは難しい。本稿の調査対象は新中間階層の母親であるうえ、調査地域を中国の東南地域である上海市と南京市に限定したため、ほかの地域に住む母親たちの状況は明らかではない。新中間階層の母親たちの居住地域によ

(4) いわゆる母親になる可能性のある人。

る差異を捉えることを今後の課題としたい。第2に、父親業に関する検討がなされていない。本稿は母親業を分析することを目的としていたため、父親業を意図的に省略した。しかし、母親業は父親業と相互作用し、父親業から影響を受ける可能性が考えられる。父親業を分析の視点に入れることで、新たな結論を得られる可能性があるといえる。

参考文献

[欧文献]

- Brugère, Fabienne, 2011, *L'Ethique du Care*, Paris: Presses universitaires de France. (原山哲・山下りえ子訳, 2014, 『ケアの倫理——ネオリベラリズムへの反論』白水社.)
- Chodorow, Nancy, 1978, *The Reproduction of Mothering: Psychoanalysis and the Sociology of Gender*, Berkeley: University of California Press.
- Gilligan, Carol, 1982, *In a Different Voice: Psychological Theory and Woman's Development*, Cambridge Mass.: Harvard University Press. (岩男寿美子監訳, 1986, 『もうひとつの声——男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』川島書店.)
- Hays, Sharon, 1996, *The Cultural Contradictions of Motherhood*, New Haven, CT: Yale University Press.
- Kittay, Eva Feder, 1999, *Love's Labor: Essays on Women, Equality, and Dependency*, New York: Routledge. (岡野八代・牟田和恵監訳, 2010, 『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』白澤社.)
- Kleinman, Authur, 2019, *The Soul of Care: The Moral Education of a Husband and a Doctor*, New York: Viking.
- Noddings, Nel, 1984, *Caring: A Feminine Approach to Ethics and Moral Education*, Barkley: University of California Press. (立山善康・清水重樹・新茂之・林泰成・宮崎宏志訳, 1997, 『ケアリング 倫理と道徳の教育——女性の観点から』見洋書房.)
- Rich, Adrienne, 1976, *Of Woman Born: Motherhood as Experience and Institution*, New York: W.W. Norton.
- Ruddick, Sara, 1995, *Maternal Thinking Toward a Politics of Peace: With a New Preface*, Boston: Beacon Press.
- Tronto, C. Joan, 1993, *Moral Boundaries: A Political Argument for an Ethic of Care*, New York · London: Routledge.

[中国語文献]

- 安超, 2020, 「科学浪潮与养育焦虑——家庭教育的母職中心化和儿童的運命」『少年兒童研究』3: 5-16.
- 陳蒙, 2018, 「城市中產階層女性的理想母職叙事——一項基于上海家庭的質性研究」『婦女研究論叢』2: 55-66.
- 蔡玲, 2021, 「異質的中產階層教養方式——理想類型与“双重”行為邏輯」『社会科学動態』10: 85 - 97.
- 金一虹・楊笛, 2015, 「教育“拚媽”——“家長主義”的盛行与母職再造」『南京社会科学』2: 61-7.
- 林曉珊, 2011, 「母職的想像——城市女性的產前檢查、身体經驗与主体性」『社会』31 (5): 133-57.
- 藍佩嘉, 2019, 「拚教養——全球化、親職焦慮与不平等童年」春山學術.
- 裴論新, 2022, 「“鷄娃不如鷄自己”——粵港澳大湾区創業女性的母職再造」『婦女研究論叢』5: 70-82.
- 沈奕斐, 2014, 「辣媽——個体化進程中母職与女權」『南京社会科学』2: 69-77.
- 吳小英, 2020, 「家庭之於女性——意義的探討与重構」『山西師大學報 (社会科学版)』47 (5): 47-51.
- , 2021, 「母職的悖論——从女性主義批判到中国式母職策略」『中華女子学院學報』2: 30-40.
- 王金娜, 2017, 「教育改革偏好与中產階層母親的教育卷入」南京師範大學博士論文.
- 肖林, 2016, 「“後院”政治——城市中產階層的“領地”意識」『文化縱橫』6: 90-7.
- 熊秉真, 2008, 『童年憶往童年憶往——中国孩子的歷史』, 桂林: 廣西師範大學出版社.
- 楊可, 2018, 「母職的經紀人化——教育市場化背景下的母職變遷」『婦女研究論叢』2: 79-90.
- 楊笛・金一虹, 2022, 「教育母職化与母職的焦慮」『社会建設』9 (1): 25-35.

- 左際平, 2005, 「20世紀50年代的婦女解放和男女義務平等——中国城市夫妻の経歴与感受」『社会』1: 182-209.
- 張品・林曉珊, 2020, 「陪伴的魔咒——城市青年父母の家庭生活、工作压力与育兒焦慮」『中国青年研究』4: 69-77.
- 朱迪, 2022, 「新興中等収入群體的崛起——互連網消費特徵及其經濟社会價值」『社会科学輯刊』1: 46-58.

【日本語文献】

- 赤川学, 2000, 「女性の階層的地位はどのように決まるか？」盛山和夫編『日本の階層システム4 ジェンダー・市場・家族』東京大学出版会, 47-63.
- 有賀美和子, 2011, 『フェミニズム正義論——ケアの絆をつむぐために』勁草書房.
- 元橋利恵, 2019, 「戦略母性主義の可能性——ケアの倫理と母性研究の接続のための整理」『年報人間科学』40: 73-86.
- , 2021, 『母性の抑圧と抵抗——ケアの倫理を通して考える戦略的母性主義』晃洋書房.
- , 2022, 「母性と体制 自己犠牲とロマンチズムをこえて」『シモヌ』6: 128-33.
- 村田泰子, 2023, 『「母になること」の社会学——子育てのはじまりはフェミニズムの終わりか』昭和堂.
- 落合恵美子・山根真理・宮坂靖子・周維宏・斧出節子・木脇奈智子・藤田道代・洪上旭, 2004, 「変容するアジア諸社会における育児援助ネットワークとジェンダー——中国・タイ・シンガポール・台湾・韓国・日本」『教育学研究』71 (4): 382-98.
- 岡野八代, 2015, 「ケアの倫理と福祉社会学の架橋に向けて——ケアの倫理の存在論と社会論より」『福祉社会学研究』12: 39-54.
- 岡真理, 2000, 『彼女の「正しい」名前とは何か——第三世界フェミニズムの思想』青土社.
- 沢山美果子, 2013, 『近代家族と子育て』吉川弘文館.
- 山根純佳, 2010, 『なぜ女性はケア労働をするのか——性別分業の再生産を超えて』勁草書房.
- 吉原令子, 2013, 『アメリカの第二波フェミニズム——一九六〇年代から現在まで』ドメス出版.

(ちょう しかん・博士後期課程)